St. Luke's International University Repository

A Survey on the Graduates of Baccalaureate Program who entered a Postgraduate Program.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 香春, 知永, 横山, 美樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/296

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

―資 料―

聖路加看護大学学部卒業生の大学院進学に関する動向調査

香 春 知 永[1)], 横 山 美 樹[2)]

要 旨

聖路加看護大学学部卒業生の大学院への進学の実態および進学の動機，教育の成果を明らかにし，聖路加看護大学大学院教育の今後のあり方を考える資料とする事を目的とし実態調査を実施した。

調査対象者は，昭和43年3月～平成4年3月までの聖路加看護大学学部卒業生および平成5年3月での卒業見込み者のうち，大学院進学者および進学予定者の136名とした。郵送による質問紙調査を実施し有効回答数103名，回収率は75.7%であった。その結果，以下の実態が明かとなった。

1）聖路加看護大学大学院修士課程への進学者は62名（学部生34名，編入生18名）で60.2%、他大学大学院修士課程への進学者は41名（学部生33名，編入生8名），39.8%であった。うち国外の大学院修士課程へは11名が進学していた。博士課程進学者は19名（18.4%）であった。

2）大学卒業後，大学院修士課程進学までの期間は平均6.38年で，学部生では7.14年，編入生では4.12年であった。

3）修士課程では国内14校，国外14校に進学しており，看護学研究科以外に医学系，社会学，教育学などの領域での研究科に進学していた。博士課程では，国内の大学院へ13名が，国外の大学院には6名が進学していた。

4）大学院進学の動機については，「具体的な関心領域・テーマの追求」，「看護専門領域の能力の向上」，「研究能力の向上・獲得」，「学習意欲の高まり」，「学位取得」などがあげられた。大学院教育の成果については，「現象・事象の見方，考え方の変化」，「研究能力の変化」，「看護専門領域の基盤作り」，「看護観の変化」，「ネットワークの広がり」などがあげられた。

5）大学院修士課程修了者66名の就職状況に関しては，教員（看護教育機関）が39名（59.1%），看護婦・保健婦・助産婦13名（19.7%），研究員，病院管理職などであった。

キーワーズ

聖路加看護大学　卒業生　大学院進学　進学動機　大学院教育の成果

Ⅰ. はじめに

日本で初の看護系大学院（修士課程）が1979年千葉大学大学院で認可され，さらに翌年1980年に聖路加看護大学大学院（修士課程）が認可されて10年以上経過した。その間，北里大学大学院，日本赤十字大学大学院，東京医科歯科大学大学院がそれぞれ修士課程を開設し，聖路加看護大学では1988年3月に大学院看護学研究科に博士課程の設立が承認された。また，看護基礎教育課程の大学教育化の意識も高まり，1990年代に入り看護系大学が急増し，多くの大学卒業生が輩出されている。そして，大学卒業生は，増加していく大学・短期大学の教員候補として，さらに大学院へと進学している傾向にある。

大学卒業生が増加し，大学院への進学の門戸も広がりつつある現在，大学院教育に学生は何を期待してい

1）聖路加看護大学講師（看護学原理）
2）元聖路加看護大学講師（看護学原理）

るのか，また，大学院教育を受けたことが自分の将来にどのように役立っているのかを知ることはこれからの大学院教育のあり方を検討するうえで重要なことだと考えられる。そこで，聖路加看護大学学部卒業生の大学院への進学の実態および進学の動機を明らかにし，大学院教育に対する今後示唆を得て，聖路加看護大学大学院教育の今後のあり方を考える資料とする事を目的とし調査を実施したのでここに報告する。

II. 調査目的

今回の調査目的は，下記の通りである。

1)聖路加看護大学卒業生の大学院進学の実態を明らかにする。

2)聖路加看護大学卒業生の大学院進学への動機を明らかにする。

3)聖路加看護大学卒業生の大学院教育への期待および教育成果を明らかにする。

III. 調査対象および方法

1)対象

昭和43年3月～平成4年3月までの聖路加看護大学卒業生および平成5年3月での卒業見込み者(1344名)のうち，大学院に進学した，あるいは入学手続きを終了した者で，調査者が把握できた136名を対象とした。

2)調査期間

平成4年12月現在の状況について回答を求めた。調査期間は，平成4年12月1日～平成5年1月30日であった。

3)調査方法

調査方法は郵送法とし，回答は無記名とした。

4)調査用紙の作成

調査内容は，下記の項目とした。

(1)卒業年

(2)大学院へ進学した年

(3)進学した大学院の名称（大学院名，研究科名，専攻分野，学位名称）

(4)大学院進学の動機

(5)大学院教育で成果（役だったこと）

(6)大学院修了後の職業

また，対象者の率直な意見を得るため，(4)と(5)については自由記載とした。

作成した調査用紙は，プレテストを行いさらに修正を行った。

5)分析

得られたデータは，目的に従い，項目毎に集計した。また，自由記載については，内容分析を行い分類した。

IV. 結果

1)対象者の背景

昭和43年3月～平成4年3月までの聖路加看護大学学部卒業生および平成5年3月での卒業見込み者（1344名）のうち，大学院進学について調査者が把握でき，調査用紙を配布したのは136名(10.1%)であった。調査用紙の配布および回収状況は，表1に示すとおりであった。136名中，回収されたのは103名で回収率は75.7%であった。修士課程を修了したものが66名(64.1%)，平成4年12月現在在学中のものは22名(21.4%)，平成5年度入学手続き終了者が15名(14.6%)であった。

表1 調査表配布・回収結果

	配布数	回収数	回収率(%)
修士課程修了者	91	66	72.5
修士課程在学者	29	22	75.9
平成5年度修士課程入学手続き終了者	16	15	93.8
合　　計	136	103	75.7

修士課程への進学者における学部生と編入生の人数は，表2に示すように，学部生77名(74.8%)，編入生26名(25.2%)であった。修士課程進学者103名中，後期博士課程へ進学した者は17名(16.5%)であった。また2名は平成5年度から後期博士課程に入学する手続きを終了していた。聖路加看護大学大学院への進学者は62名(60.2%)で，学部生34名，編入生18名であった。他大学大学院への進学者は41名(39.8%)で，学部生33名，編入生8名であった。聖路加看護大学大学院進学者のうち編入生は29.0%をしめ，他大学大学院進学者では編入生は19.5%をしめていた。

2)大学院へ進学するまでの期間と年度別進学者数

学部を卒業してから大学院修士課程へ進学するまでの期間は，学部卒業後0年～24年で平均すると6.38年であった。学部生が平均7.14年であるのに対し，編入生では平均4.12年と約3年間の差があった。(表3参照）また，修士課程進学までの期間0年が16名と最も多く，2年間，3年間，5年間が各々10名づつとなっていた。0年の16名のうち編入生が12名を占めており，2，3，5年間の合計30名においては29名が学部生であった。

修士課程修了後そのまま博士課程に進学した者は，6名であった。その他，修士課程修了後8年～17年後に博士課程に進学していた。

年度別修士課程進学者数は、表4に示すとおりであった。聖路加看護大学大学院が開設された年は、聖路加看護大学大学院に5名進学していた。1989年以降か

表 2　修士課程進学者における学部生・編入生の人数

		学部生数	編入生数	合計(%)
修士課程修了者	聖路加看護大学大学院	26(39.4)	9(13.6)	35(53.0)
	他大学大学院	27(40.9)	4(6.1)	31(47.0)
	合　計	53(80.3)	13(19.7)	66(100.0)
修士課程在学者	聖路加看護大学大学院	13(59.1)	5(22.7)	18(81.8)
	他大学大学院	3(13.6)	1(4.5)	4(18.2)
	合　計	16(72.7)	6(27.3)	22(100.0)
平成5年度修士課程手続き終了者	聖路加看護大学大学院	5(33.3)	4(26.7)	9(60.0)
	他大学大学院	3(20.0)	3(20.0)	6(40.0)
	合　計	8(53.3)	7(46.7)	15(100.0)
全　体	聖路加看護大学大学院	44(42.7)	18(17.5)	62(60.2)
	他大学大学院	33(32.0)	8(7.8)	41(39.8)
	合　計	77(74.8)	26(25.2)	103

表 3　修士課程進学までの平均期間(年)

	学部生	編入生	全　体
修士課程修了者	6.40	4.15	5.95
修士課程在学者	9.50	4.50	8.14
平成５年度修士課程入学手続き終了者	7.38	3.71	5.67
合　　計	7.14	4.12	6.38

表 4　年度別修士課程進学者数(*, ** 同一人物)

進学年度	聖路加看護大学大学院	他大学大学院	合計(%)
1972	0	1	1(1.0)
1973	0	1	1(1.0)
1974	0	0	0(0)
1975	0	1*	1*(1.0)
1976	0	1	1(1.0)
1977	0	1+1**	1+1**(1.9)
1978	0	1	1(1.0)
1979	0	2	2(1.9)
1980	5	2	7(6.8)
1981	1	2+1*	3+1*(3.9)
1982	1	0	1(1.0)
1983	1	0	1(1.0)
1984	3	2+1**	5+1**(5.8)
1985	3	2	5(4.8)
1986	5	0	5(4.8)
1987	2	2	4(3.9)
1988	2	2	4(3.9)
1989	6	7	13(12.6)
1990	6	3	9(8.7)
1991	7	2	9(8.7)
1992	11	2	13(12.6)
1993(入学予定)	9	6	15(14.6)
合格者数	62(60.2)	41(39.8)	103

ら聖路加看護大学および他大学大学院ともに進学者数が増えていた。

3)進学した大学院の概要

修士課程（前期博士課程）および後期博士課程における修了者，在学者，平成５年度入学手続き終了者別にみた大学院一覧は表５に示すとおりである。卒業生の進学した大学は，国内では14校，国外は14校であった。

修士課程において，国内の大学院に進学したのは94名(91.7%)，国外の大学院に進学したのは11名(10.7%)であった。また，２名は国内の他大学大学院修士課程修了後，再び国外の大学院修士課程に進学していた。聖路加看護大学大学院修士課程以外で最も進学しているのは東京大学大学院医科系研究科で５名であった。看護学研究科以外では，医学系，社会学，教育学などの領域の研究科に進学していた。

国内大学院における看護学研究科修士課程進学者（入学手続き終了者を含む）68名の専攻分野は，表６に示すとおりであった。地域看護学が最も多く15名(22.1%)，続いて精神看護学の13名(19.1%)，母性看護学11名(16.2%)，看護教育学10名(14.7%)で過半数を占めていた。その他は，北里大学大学院への入学手続き終了者で，専攻分野はがん看護学であった。

修士課程修了者103名のうち，後期博士課程に進学したのは19名(18.4%)で，国内の大学院に13名が，国外の大学院には６名が進学していた。最も進学者の多い大学院は，聖路加看護大学大学院で５名，続いて東京大学大学院医科系研究科の保健学を専攻した４名であった。

4)大学院進学の動機

(1)修士課程進学の動機

修士課程進学の動機について、回答は全部で240件あった。(複数回答)これらの回答の内容分析の結果，表７に示すような項目に分類された。

自分の関心のある領域やテーマに関して「新しい知識を得たい」、あるいは現在の職業経験から生じた「課題や問題意識と感じていることを解決したい、あるいは追求したい」、仕事に関して「現在の自分の能力による限界を感じて」といった具体的関心領域やテーマを

表 5　大学院修士・博士課程一覧および進学者数　　(*, ** 同一人物)

大学院名	修士課程（博士課程前期）					博士課程後期				
	取得学位名称	修了者数	在学者数	入学手続終了者数	合計	取得学位名称	修了者数	在学者数	入学手続終了者数	合計
聖路加看護大学大学院 看護学研究科	看護学	35	18	9	62		1 満期退学	4	0	5
東京大学大学院医学系研究科	保健学	4+1**	2	2	9	保健学	3	1	0	4
立教大学大学院社会学研究科	社会学	2+1*	1	1	5					
筑波大学大学院										
医科学研究科	医科学	2	0	0	2					
体育科学研究科	体育学	1	0	0	1					
教育学研究科	教育学	1	0	1	2					
千葉大学大学院看護学研究科	看護学	4	0	0	4					
北里大学大学院看護学研究科	看護学	1	0	1	2					
東洋大学大学院社会学研究科	社会学	2	0	0	2	社会学	0	2	0	2
東京学芸大学大学院 教育学研究科	教育学	1	0	0	1					
国際基督教大学大学院 教育学研究科	教育学	1	0	0	1					
日本女子大学大学院 文学研究科	社会福祉学	1	0	0	1					
国立公衆衛生院専門課程	公衆衛生学	1	0	0	1					
島根大学大学院教育学研究科	教育学	0	0	1	1					
群馬大学大学院 公衆衛生学研究科							0	0	1	1
昭和大学大学院医学研究科							0	0	1	1
Boston University Nursing	MS in nursing science	1+1*	0	0	1+1*					
University of Chicago, Dep. of Public Health	MS in nursing science	1	0	0	1					
New York University, School of Nursing, Health, Nursing, Arts Profession	MA	1	0	0	1					
University of Illinois, School of Nursing	MS in nursing	1**	0	0	1**		0	1	0	1
Northren Illinois University, Medical/Surgical Nursing	MS	1	0	0	1					
University of Pittsburgh, School of Nursing	MN	1	0	0	1					
Oregon Health Sciences University, School of Nursing	MS	1	0	0	1					
Oregon State University, Education	MA	1	0	0	1					
University of Rochester, School of Nursing, MS Program PhD Program	MS	1	0	0	1		0	1	0	1
Calgarly University, Hospice/ Palliative Care Nursing		0	1	0	1					
Rush University, College of Nursing							0	1	0	1
University of Texas at Austin, School of Nursing							0	1	0	1
University of California, San Francisco, School of Nursing						DNSc.	1	0	0	1
University of Washington, School of Nursing						PhD.	1	0	0	1
国内大学院進学者数		58	21	15	94		4	7	2	13
国外大学院進学者数		8+2*,**	1	0	9+2*,**		2	4	0	6
合計		66	22	15	103		6	11	2	19

表6　国内大学院における看護学修士課程専攻分野

専攻分野名	修了者	在学者	入学手続き終了者	合計(%)
成人看護学	5	2	1	8(11.8)
母性看護学	8	2	1	11(16.2)
小児看護学	4	1	0	5(7.4)
精神看護学	8	3	2	13(19.1)
地域看護学	8	4	3	15(22.1)
看護教育学	4	5	1	10(14.7)
看護管理学	3	1	1	5(7.4)
その他	0	0	1	1(1.5)
合　計	40	18	10	68

表7　大学院修士課程進学の動機　(複数回答)

	修士課程修了者	在　学　者	平成5年度入学手続き終了者	合　　計
具体的な関心領域・テーマの追求	30	16	9	55
看護専門領域の能力の向上	27	4	7	38
研究能力の向上・獲得	17	9	8	34
学習意欲の高まり	15	4	0	19
学位取得	11	2	5	18
物事のとらえ方，考え方の学習	8	5	3	16
学習時間・学習環境の確保	9	3	0	12
看護観の再検討	6	3	2	11
他者からの勧め・影響	4	1	0	5
進学の機会があったこと	4	0	0	4
専門職としてのアイディンティティの確立	1	0	1	2
その他	8	4	2	14
合　計	140	51	37	228

もち，それらを明らかにしたいという動機が55件(24.1%)と最も多かった。また,「これまでの経験を統合し自分の専門性を明らかにしたい」,あるいは「自分の専門領域の知識や技能を向上させたい」という専門性(スペシャリティ)の能力の向上を動機としてあげた回答は38件(16.7%)あった。このように，これまでの職業経験などを通して具体的な進学目的をあげた回答が全体の40.8%を占めていた。さらに，看護観の再検討，専門職としてのアイディンティティの確立という動機を加えると，明らかに看護に関連しての動機を持ち進学したという回答は106件で，全回答数の約半数を占めていた。

看護以外でどのような教育を期待して進学してきたかということに関しては,「研究方法の基礎知識」や「研究実践能力の基礎の育成」といった研究能力の向上・獲得についてが，34件(14.9%)があげられており，特に「基礎力」という表現をしていた回答が多かった。また対象や焦点は明確にしていないが,「勉強したい」,「学習したい」という意欲を動機としてあげていたものも19件(8.3%)あった。「系統的な思考」や「視野の拡大」といった物事のとらえ方や考え方を学習したいと回答したものは16件あった。

大学や短期大学の看護教員の要件と関連して，修士号の学士取得を目的としたものは18件あがっていた。

その他，仕事などから離れて学習時間や環境を確保するため，大学院という課程に進学したという回答は12件あった。「上司や知り合いに進められた」，「修士課程修了者からの刺激を受けて」あるいは「大学院が開設

表 8　大学院教育の成果　(複数回答)

	修士課程修了者	在　学　者	平成5年度入学手続き終了者	合　　計
現象・事象の見方・考え方の変化	30	10	5	45
研究能力(知識・実践能力)の変化	20	7	4	31
看護専門領域の基盤作り	11	4	5	20
看護観の変化	9	5	2	16
ネットワークの広がり	10	4	1	15
自己観の変容	5	6	0	11
職域の拡大	10	0	0	10
専門職としてのアイデンティティの確立	4	2	0	6
今後の関心テーマ，研究課題の方向性の明確化	7	0	0	7
その他	5	2	2	9
	111	40	19	170

された」，「仕事や生活の大学院進学のための仕事や生活の条件がととのった」など外的な要因を動機としてあげていた回答もあった。

(2)博士課程進学の動機

博士課程に進学した19名から，進学動機について得られた回答は32件（複数回答）あった。

動機として最も多くあげられていたのは，学位取得で8件であった。これは職業上の必要性，昇格や研究者・教員としての要件からあげられていた。

「研究の能力を身につけるため」，「研究者として自立するため」といった自立的な研究実践能力を獲得するためが6件，また自分なりの考えや理論を発展させていくという方向でのテーマの探求が6件，エキスパートとしての能力を獲得するために知識や技能を修得することが6件とあがっていた。その他，社会への貢献や変化をもたらす能力を身につけるためという回答があげられていた。

5)大学院教育の成果

大学院教育がどのように役立ったか(修了生)，あるいは役立つと考えるか(在学生，入学手続き終了者)という大学院教育の成果に関する回答は，全部で170件あった。(複数回答)これらの回答を内容分析した結果，表8に示すような項目に分類された。

最も多く成果としてとらえられたのは，「多角的」，「概念的」，「本質をみる」，「科学的・理論的」，「視野の広い」といった，「現象や事象の見方や考え方」であり，45件(26.5%)の回答があった。つづいて「研究の基礎知識の修得」，「自立して研究を実施できる能力の獲得」，「研究的態度の形成」という「研究に関する知識や実践能力の向上」に成果があるという回答は31件(18.2%)であった。

看護に関連した教育成果については，「看護専門領域の基盤作り」，「看護観の変化」，「専門職としてのアイデンティティの確立」，今後の関心テーマ，研究課題の方向性の明確化」といった成果があげられていた。これらは，総計すると49件の回答数(28.8%)であった。「看護の専門領域の基盤作り」に関しては，具体的には自分の専門領域の知識の獲得，実践技能の向上など看護の中でも専門性(スペシャリティ)に関連した内容があげられていた。

具体的な学問的な能力の変化（思考，知識の獲得，技能の向上など）だけでなく，大学院教育を通して，自分自身に対する自信の獲得や自己理解の深まりなど自己観の変容も成果としてあげられていた。

また，大学院教育を受けることでの付随的な成果として「ネットワークの広がり」，「職域の拡大」があげられていた。特に，「ネットワーク」については，指導を受けた教員，同窓生，同期生を通しての人的なネットワークの拡大が強調されていた。また，学位を取得することでの職業選択の拡大に関しては，特に大学教育の教員の資格としての修士・博士の学位の意義があげられていた。

6)大学院修了後の職業

大学院修士課程を修了した66名のうち，就職したのは60名(90.9%)，就職しなかったのは6名(9.1%)であった。具体的な職業については，教員(看護教育機関)の39名(59.1%)が最も多く，看護婦8名，保健婦4名，研究員3名，病院管理職2名，助産婦，企業健康管理保健婦，養護教諭，行政がそれぞれ1名づつであった。

V. 考察

修士課程に進学した103名のうち，学部生は77名，編入生は26名であった。聖路加看護大学大学院への進学者は62名でうち編入生が18名，29%を占めていた。他大学大学院への進学者は41名でうち編入生は8名で19.5%と聖路加看護大学大学院では，編入生が占める比率が他大学大学院より多かった。また，学部卒業から進学までの期間も平均7.14年であるのに対し，編入生は平均4.12年と短く，編入生が大学院進学までを考慮し聖路加看護大学に編入していることがうかがえる。

また、1989年以降大学院への進学者数は増加しており，これは看護基礎教育課程の大学化に伴う教員養成目的が反映していると思われる。このことは，大学院進学の動機にもあらわれており，教員資格としての学位取得を目的としているものが多かった。

大学院修士課程への進学動機においては，看護に関しての具体的なテーマや関心領域が明確化されており目的意識を持ち進学していることが明かとなった。その一方で，教育の成果としては研究の基礎能力の向上や現象や事象の見方，考え方の変化をあげている回答が多く(全回答数の約44%)，看護に関連しての成果の占める割合は高くはなかった。(全回答数の約29%)このことから，国内・外大学大学院教育が概念化・理論的思考，研究という側面に影響を及ぼしていると考えられる。日本においては，法律で「修士課程は広い視野に立って精深な学識を授け，専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業などに必要な高度の能力を養うことを目的とする」と述べられており，このような目的をもった修士課程教育の成果は得られているといえる。しかしながら，将来「Clinical nurse specialistなど専門看護婦の教育を大学院で」という動向もあり，今後，看護専門領域の能力の向上という側面からの成果が得られるような教育内容を考えていくことは重要であると思われる。また，修士課程修了後もそのほとんどが看護教員として就職しており，修士課程専攻分野で修得した専門性（スペシャリティ）を臨床領域で発揮しているものは少なかった。これは，現在の日本における看護基礎教育課程の大学化に伴う人材育成としての大学院教育の意義が，より優先されているためと思われる。

博士課程進学動機については，研究者としての自立や看護の理論化や社会への貢献といった内容があらわれており，より自律した看護専門職者であり看護学の体系化への寄与する活動を研究を通し実践していく能力の育成が期待されていくと思われる。

今後，聖路加看護大学大学院修士・博士課程の教育のあり方として，進学者の動機を考慮しまた教育の成果という視点からの評価を行い，動機に対応した教育内容での学生の満足感の充足や社会の変化に対応した内容にしていくことは，聖路加看護大学大学院の発展にとっても重要なことと考える。本調査の研究では，教育を受ける学生の視点からの１つの教育の評価であると考えられる。さらに社会の変化に伴うニーズをも含め，聖路加看護大学大学院のあり方を考えていくことは，今後の重要な課題であるを思われる。

謝辞

本調査実施の機会を与えて，また調査結果の分析まで参加して下さいました本学，故檜垣マサ名誉教授に心より感謝致します。また，本調査にご協力下さいました卒業生の皆様に感謝致します。

参考文献

1） 豊澤英子：看護の修士課程教育の成立と展開(その1)，看護教育，34(1)，72-77，1993.

2） 豊澤英子：看護の修士課程教育の成立と展開(その2)，看護教育，34(2)，152-157，1993.

3） 豊澤英子：看護の博士課程教育の成立と展開(その1)，看護教育，34(3)，228-234，1993.

4） ［特集］看護教育における評価研究　第9章シンポジウム：看護教育はなぜ高められる必要があるのだろうか ー大学院教育の必要性に焦点をあてて，看護研究，23(1)，105-121，1990.